

ギリシア喜劇断片(四)

下田立行

アレクシス(続き)

『手紙』

ΕΠΙΣΤΟΛΗ

ゲッリウス『アッティカ夜話』二・二三・一によると、ローマの喜劇詩人カエキリウスが、この作品に依拠して同名の喜劇を書いた。断片八一は『スーダ辞典』等に残る一語断片で、「躓いた」の意味の動詞である。

『代理人』

ΕΠΙΤΡΟΧΟΣ

題名となっている語の意味は執事、管理人、代行者なども考えられるが、残っている断片だけでは分からない。

八二

なぜなら、大量の飲酒は多くの過失を生むものだから……

〈出典〉アテーナイオス 四四三F。酒の害について述べたくだり

で、少し上に断片四四も引用されている。

『テーバイへ向かう七人』

ΕΠΤΑ ΕΠΙ ΘΗΒΑΣ

アムピスにも同名の喜劇があり、これらは言うまでもなくアイスキュロスの同名悲劇のパロディーであろう。

八三

それと一緒に脂のたつぷりとのった穴子の切身が
うずたかく盛られ……

〈出典〉アテーナイオス 二九四B。

【注】穴子については断片一五でも述べられている。なお、「うずたかく盛られ」と訳したものはソーレウタ *σολεῦτα* という形容詞であるが、これについてはポージェイオスが、「煮込んでないものはエピメストスへたくさんの」といいソーレウトスとはいわない」としている。ソーレウオー *σολεῦω* は「上に積み重ねる」の意の動詞。ポージェイオスが正しいとして、そこから派生した受動的な意味

の形容詞がそのように限定的な用いられ方をした理由は分からない。

『エレトリア人』

ΕΡΕΤΡΙΚΟΝ

エレトリアという地名は古代ギリシアに何ヶ所かあるが、一般にはエウボイア島中央西岸の都市を指すことが多い。

八四

鳥賊、スピナ、かすべ、貝類、揚げ魚、

薄切り肉、ホルモン……。だが俺は、鳥賊の

耳を切り落として脂身を少々混ぜ、

スパイスを全体にふりかけて、

細かく切った野菜と混ぜて詰め物にした。

〈出典〉アテーナイオス 三二六D、「アレクシスは『エレトリア人』で料理人に次のように言わせている。【本断片】」。

【注】最初の二行はやや壊れており、語彙も問題がある。「ホルモン」と訳した語までは単語の主格の羅列で、料理を作るべく手元にある材料を列挙したのか。以下疑問のある語について検討する。スピナとそのままカタカナ書きにした語 *spinna* は、校本でもアクセントが付けられておらず不明。ただ、ピンナイ *pinna* もしくはピンナイ *pinna* とする説があり、それだと一種の細長い形の二枚貝と見られ、これは種類の特定は困難だが喜劇詩人たちが美味とし

てしばしば取り上げている。また、貝類と訳した語も、デーモス *deimos* 「国民」では不可解なので、Meineke はケーモス *keimos* と校訂している。一般には *kythos* だが、第一変化名詞が第二変化名詞の形態をとることは、ギリシア語ではさほど珍しいことではない。これなら普通の二枚貝のことである。Kock は プレームナス *preumnas* と校訂しており、これは鮪の類。なお、アテーナイオスの引用個所前後では鳥賊がさまざまな角度から取り上げられている。「揚げ魚」と訳したアピュエー *apue* はヘーシユキオスによると *meipras* 「鱈」の意味にもなるという。

『井戸に身を投げる女』

Η ΕΙΣ ΤΟ ΦΕΡΑΡ

題名だけでは女が井戸に身を投げるのか、突き落とされるのか、それともまったく違う意味なのか分からない。だが、アリストパネースの散逸作品『アナギュロス』に関連してポーティオスに面白い記述があるので、ここで見ることにする。ポーティオスの記述は以下のとおり (α1432)。

アナギュロスの祟り。英霊アナギュロスが聖林の樹を伐った隣家の老人に復讐したことから。アナギュラシオイはアッティカの一市区（の住民）を指す。そこのある住民が聖林の樹を伐った。そこでアナギュロス（の霊）はその男の妻が（義理の）息子に対して狂おしい恋心を抱くようしむけた。だが、女は息子を口説き落とすことができなかつたため、息子のほうがちょっとかいを出したかのように父親に言いつけた。男は息子を去勢し、幽閉した。そ

の後、父親は首を吊って死に、妾は井戸に身を投げた。以上はヒエローニユモス〔前四〕三世紀の歴史家〕が『悲劇詩人論』で語り、エウリーピデースの『ポイニクス』と比べている話である。

以上がポーターイオスの記述であるが、多少の注が必要であろう。アナギュロスもしくはアナギュリスは本来非常に悪臭を放つ豆科植物で、これが多生するということで、アッティカの一地区の名がアナギュリスと名づけられたらしい。英雄アナギュロスは他に知られていないので、土地の英雄として捏造されたものであろう。アリストパネース『女の平和』にアナギュリス区の住民が登場すると悪臭が漂ってくるという挿話があり、一登場人物が「アナギュロスを動かしたらしい」という。これはこの「寝た子を起こす」に類似する俚諺の初出とされる。俚諺収集家のゼーノビオスなどは「アナギュロス」を英雄とし、ポーターイオスもそれに従っているわけであるが、この俚諺の起源は『女の平和』の文脈からも読み取れるように、植物と見るべきであろう。話が脇にそれたが、ポーターイオスのこの一文の中に、女が井戸に投身自殺することが、本喜劇の題名で用いられているのと同じ表現で出てくるわけである。

八五

………甲…なあ、今日那が
俺をよこしたのは葡萄酒を一瓶とってこいというんだ。
あそこから家の中のものを持ってこいってね。乙。分かっとる。
宴会の差し入れにしようというんじゃろう。
甲…助かるぜ、物分かりのいい婆さんでよ……

〔出典〕アテーナイオス 三六四F、「昔の人たちはある種のご馳走をエビドシマ *epidosima* と呼んでいる……アレクシスが『井戸に身を投げる女』の中で【本断片】と」。

【注】アテーナイオス引用文のエビドシマは、「追加に与えられた」というのが原義で、予定の食事以外に何らかの仕方です想外に加えられる料理等を指す。原典一行目は *Staveigehausar* の校訂に従って訳した。Bookの述べているように、他人の家の宴会に葡萄酒を供出させられる老婆はたぶん怒っているのである。なお、Loeb版では二行目の話者の割り振りが異なっており、「あそこから」に相当する語（原文では、二行目甲の台詞の最後に置かれる）を乙の台詞とし、かつ疑問文としている。

八六

………パンを得ようとして
哀れな人間たちはありとあらゆる罌を仕掛け……

〔出典〕アテーナイオス 一〇九B、「やがてパンや様々の料理が山のように運び込まれてくると、「キニユールコスは」それをじっと見つめていった。〔本断片〕。これはアレクシスの『井戸に身を投げる女』の中の台詞だ」と。

【注】アリストパネース『鳥』五二七以下に鳥を獲るための七種の罌が羅列されており、ここの「罌」バギス *bagis* も含まれる。この語の語源が *manalyz manalyz* 「固定する」であること、また鼠取りにもこ

の語が用いられて例があることから、バネで挟むタイプのものかと思われるが厳密なことは言えない。(Cf. Dunbar: *Aristophanes, Birds*. Oxford 1995. p.361)。

断片八七はアレクシス『バイドーンまたはバイドリアー』断片二四九と同じ詩句が『井戸に身を投げる女』にも見える、というアテーナイオスの指摘(三四〇C)。

『ヘーシオネー』

HSIONH

悲劇詩人デーメートリオスが同名のサテュロス劇を書いていると推測されている (Cf. Snell: *Tragicorum Graecorum Fragmenta*, vol. I, p.189)。ヘーシオネーはギリシア神話上三名いるが最も実質を伴うのはトロイア王ラーオメドーンの娘、プリアモスの姉。神によって送り込まれた怪物の人身御供として捧げられて、ヘーラクレスに助けられるなど、ペルセウスに助けられたアンドロメダーと類似の神話を持つ。以下の引用断片の文脈等からヘーラクレスが登場することは明らかであり、その神話のパロディーと考えてよいであろう。

八八

……………あの方はやっと正気をとりもどすと

杯をくれといい、それを受け取って立て続けに何杯も

浴びるように呑むのです。まるで諺どおり、

あの方はいつだって、へ人間とはまことに一方では酒袋であり、

他方では粉袋である」という有り様なのです。

〈出典〉アテーナイオス 四七〇E、「……アレクシスが『ヘーシオネー』の中で次のように、ヘーラクレスが酒を飲む様を描いている。【本断片】。エウスタテイオス『オデュッセイア注解』一六四六・一九「へ人間とはまことに一方では酒袋であり、他方では粉袋である」という諺があることを思い出すべきである。この諺によって生の二つの側面が現されているように見える」。

【注】Meineke は詩人が「ヘーシオネーを解放した後でヘーラクレスは体力消耗のあまり正気を失った、という設定にしたのではないか」と述べ、Fraenkel は「ヘーラクレスが過度の酩酊状態からようやく覚醒し、正気を取り戻してから、再び杯を要求した、と見る。「諺」の中の酒袋が大酒を、粉袋が大食を指していることは見やすい。人間を袋に喩えるのはそれなりに理解できるが、俚諺収集家の著作中にはこの諺が見出されない。エウスタテイオスのいう「生の二つの側面」というのは大袈裟な感がある。強いて言えば飲酒は死に通じ、食事は生に通じるともいえるが、いずれにせよ喜劇の文脈の中では、伝統的な大酒大食の英雄ヘーラクレスの姿が諷刺的に誇張して描かれていると見れば十分であろう。語り手が誰か分からないが、断片八九の三行目の「私」がヘーシオネーだとすれば、この断片についてもその可能性はある。

八九

あの方は、二人の使用人が部屋の中へテーブルを

——山海の珍味を盛った皿が豪盛に並んだのを——
運び込むのを見ると、もう私には目もくれませんでした……

〈出典〉アテーナイオス 三六七F。

【注】前述のようにこの断片の三行目に人称代名詞一人称単数対格が出る。あいにく、男性か女性かを区別する要素はないが、「私に目もくれない」という表現からヘーシオネーである可能性は極めて高い。

九〇

ベルゲー〔風〕の。アレクシスが『ヘーシオネー』で

「ほら話なのです……」

「ベルゲー風のたわごとであることを証明すること……」

今はあなた方が自分の目で見ることです。私は

「なぜなら、彼は一人で……に突入したので」

ベルゲーはトラキアの〔都市〕」

〈出典〉パピルス (Pap.Ox.1801 (saec.I^p), 50-55).

【注】二—五行が『ヘーシオネー』からの引用と考えられている。この四行を補完するためにいくつかの校訂意見が出されているが、決定的証拠はあるはずもないのでここでは詳しく述べない。だが、これもヘーラクレースによる怪物退治とヘーシオネーの救出にまつわる話と思われる。五行目冒頭の欠落部分はモノス *Μονος* 「一人

で」またはクセノス *Κενος* 「異国の方」と校訂されており、「突入した」のはいずれにせよヘーラクレースと見られる。怪物退治について根も葉もない噂がひろまり、三行目の「私」〔恐らくやはりヘーシオネーか?〕が目撃者としてそれを訂正している、と考えられる。「ベルゲー風のたわごと」についてはビザンチンのステパノス〔六世紀の文法家〕の『地名辞典』が役に立つ。「ベルゲー・ケルソネーソス（今日のギリボル半島）に近いトラキアの村。その住民をベルガイオスという。ストラポーンがこの村について書き、喜劇詩人アンティパネースはベルゲーの出身だとしている。この詩人は信じがたいことを書くとの評判がある。そのことから、何一つ本当のことを言わないことをへルゲー風を行う」（ベルガイゼイン *Beryatseu*）という諺が生じた」。ステパノスによるベルゲーの位置の記述はかなり大まかだが、ストラポーン『地誌』七断片三六に、「……ストリュエーモン河を溯るとアムピポリスから二〇〇スタディオン程離れた村、ベルゲーがある」とある。古代地図で見るとカルキディケー半島の東のストリュエーモン河を三〇キロばかり溯ったところにあつたらしい。

『乞食僧〔神懸かり〕』

ΘΕΟΦΡΗΤΟΣ

アイスキュロス『アガメムノーン』一一四〇では合唱隊によってカッサンドラーが「神懸かり」になったと歌われ、またストラポーン『地誌』一一・二・三に大カッパドキア地方の都市コマナについて記述があり、その住民は「神懸かりになった民衆と神殿奴隷がその大半を占める」と述べられており、ともに「神懸かり」には本

劇の題名と同じ語（テオポレートス θεοπολιος）が用いられている。『地誌』の記述では、コマナには戦の女神エニョオーの神殿があり、住民はその神をマーマと呼ぶとあり、マーマとはすなわち母である。また、ポージェイオス 一八三・一にはキュベーボス κυβηβος という語について、「クラテイーノスが『トラキアの女奴隷たち』でテオポレートスを（キュベーボスと呼び）、イオニア人はメートラギュルテース *μητρογαυρητες*、今はガッロス γαλλος と呼ばれる者をキュベーボスと呼んでいる」とあり、また同一八二・二〇に、キュベーボスを説明して、「神々の母に取り憑かれた者。テオポレートス（に同じ）」と書かれている。メートラギュルテースはガッロスはキュベレーを祭神とする乞食僧である。キュベレーは古代ブリュギア地方（小アジア中部から北西部へかける一帯）の豊穰の女神、大地母神とされ、別名キュベーベとも呼ばれる。テオポレートスという単語自体はギリシア語形容詞として「神によって運ばれた」すなわち「神の憑依した」の意にとるのに難がない。だが、トロイアの王女カッサンドラーの場合もそうだが、どうもこの語には古代ギリシアにおいても小アジア系の雰囲気があったらしい。神話学的なことはさておき、テオポレートスに関する面白い記述が五―六世紀アレクサンドリアの文法家、神学者ヨアンネス・ピロポノスに見られるので、ここに引用しておく。

「すでにギリシアにおいてもテオポレートスと呼ばれる者たちの一部は……剣で自分の身体を切り裂き火の中を歩いて、生まれながらの身体を火や鋼によって少しも損なわれることなく平然としているとのことである」（『世界の永遠性について』 *aet. mundi*. VI29p.241.14R）。

以上長々と述べたが、喜劇作品としては『乞食僧』にとらえておいてよいのではないかと思われる。断片九一の酔っ払いが、恐らくその職業（？）が題名となっている主人公であろう。メナンドロスがテオポレメネー『神懸かりの女』を書いている。これは語源的にテオポレートスと全く同じだが、分詞なので性が特定できる。また、この題名が乞食僧程度の意味で用いられているとすれば、メナンドロスは他にも『巫女』 *ἱερεῖα*、『乞食僧』 *μητρογαυρητες* を書き、アンティパネースも『乞食僧』を書いている。これもまた喜劇の材料としては打ってつけのもの一つだったと思われる。

九一

思うに、俺と道で出くわした奴らが難癖をつけるだろうよ。
こんな時間に酔っ払ってうるついているのは何事だ、といってね。
へん、あたぼうめ、あのお日様みたいに明るい提灯が、
いったい全体、どこにあるってんだい。

〈出典〉アテーナイオス 七〇〇A、「アレクシスが『ミドーン』で、〈夜中、提灯を持って徘徊することを最初に発明した奴は／足の爪先が心配だったのだ〉（断片一五二）と。同じアレクシスが『神懸かり』で、【本断片】。三―四行はエウスタティオス『オデッセイア注解』 p.1571.11にも。

【注】「提灯」と訳した語は、断片一五二はリュクヌーコス *λυκνυβος*、本断片ではペーノス *φανος* である。酔って歩き回るのに昼間のほうが足元が定かめよいというのは、酔っ払いらしい発

想で面白い。話し手が男性であることは二行目の分詞から分かる。

九二

俺はプトレマイオスのために蕪のスライスを焼きながら喋る……

〈出典〉アテーナイオス 三六九E。

【注】「俺は……喋る」というのが分かりにくいいため、様々な校訂説がある。動詞「私は喋る」*ῥαοοὶ ῥαοοῖ*を「お喋りの」という意味の形容詞と格*ῥαοοὶ ῥαοοῖ*に変えて「プトレマイオス」に掛ける *Bothe* 説が最も変更の少ない校訂であるが（それだと、「お喋りの」プトレマイオスに蕪のスライスを焼いてやりながら……）、*Meineke* の言うようにこのように短い断片では確実なことはいえない。引用個所の少し前で、シプノスの医師ディーピロスからの引用として「蕪は瘦身作用があり、辛く、消化しにくい……焼いた蕪はずつと消化がよくなるが、瘦身作用は増す」とある。

『テスプロローティスの人々』

ΘΕΣΠΡΟΤΟΙ

テスプロローティスはギリシア北西岸の地域名。オデュッセイア一四歌でも言及されている。テスプロローティスは、ヘーロドトス『歴史』五・九二に、「ペリアンドロスが……アケロン河畔のテスプロローティスに使いをやり、死霊の託宣を訊こうとした」とあるように交霊術の本場として知られていた。残っている唯一の断片もその

ような側面と関係があるようである。

九三

おお、ヘルメースよ、死者の露払いにしてピリッピデースの憑き神、漆黒の衣を着た「夜」の眼よ……

〈出典〉アテーナイオス 五五二D、「ピリッピデースも痩せていた。彼については弁論家ヒュペレイデースに、〈政治家の一人〉という言及がある（『弁論集』四）。ヒュペレイデースによると、ピリッピデースは痩せていたので肉体的には貧弱に見えたそうである。アレクシスも『テスプロローティスの人々』で言っている。【本断片】」。

【注】ヒュペレイデースは前四世紀アテーナイの弁論家。ピリッピデースは親マケドニアの立場を取ったアテーナイの政治家で、中新喜劇でその瘦軀と大食をたびたびからかわれている。痩せの大食の類だったのだろう。神話上ヘルメースには死者の魂をあの世に送って行く役割が与えられていた。一行目の「死者」と訳した語はテオス *θεός* で普通「神」を指すが、ここでは死者の霊と思われる。カソーポンはテオスを校訂してネクロス *νεκρός* 「死者」の複数属格としているが、必ずしもその必要はない。*Meineke* 説のとおり、ヘルメースがピリッピデースの憑き神だというのは、極度に痩せている人間はそれだけ死に近いという考えからであろう。エウリーピデース『タウリケーのイーピゲネイア』一一〇に「暗い夜の眼」とあり、そこでは「夜の眼」が「人の目が利かない夜」の意味で用い

られているが、この断片では夜の闇を見通しつつ死者の靈魂を導くヘルメース神の性格を示している。「黒い衣を着た」は「夜」にかかると修飾的形容辞として他にも見られる。Meinike はこれをテスプローティス人のところでネクロマンティオン νεκρομαντιον〔死者の靈を呼び出して占いをさせるもので、口寄せ、神降ろしの類〕を行おうとして、夜とヘルメースに呼びかけている、と見る。

『テーバイの人々』

ΘΗΒΑΙΟΙ

ピレーモーンが同名の喜劇を書いている。

九四

甲：そいつはどこから来たのかね？ 乙：金持だ。

みんなが「この上なくやんごとない」と称するようなやつなんだ。貧乏人を「高貴の生まれ」と見る奴はだれもない……

〈出典〉アテーナイオス 一五九D、「クリュネシッポスが『善悪論入門』で書いているが、イオーニア出身で大金持の若者がアテーナイに滞在したことがある。彼は金糸の縁取りのある紫衣を纏っていた。ある人がへどこからお出でで」とたずねると、若者は「金持だ」と答えたそうだ。アレクシスも『テーバイの人々』で次のように書いたとき、ひっとしたらその若者のことを思い出したのかもしれない。【本断片】。

【注】ボダボス *rodaros* は疑問副詞で本来「どの国から？ どこから？」の意味だが、「どのような」の意味で使うこともある。だが、よそから来たらしい見知らぬ人間にこの語を用いるなら、出身地を訊ねていると取るのが常識的であり、これに「金持ちだ」と答えるのは嫌味というか愚かである。アテーナイオスもその辺を突いているのであろう。

『日傭取り』

ΘΗΤΕΥΟΝΤΕΣ

題名は「雇われて働く」という意味の動詞の現在分詞男性複数主格。今風に言うると賃金労働者であるが、これはホメーロスでも「家」に属さない最下層の人々として言及されている。アテーナイの盛時には商売人さえ蔑視されていたことを思えば、賃金労働者はなおさらであつただろう。

九五

私がうなずきさえすれば、誓いは堅いものとなる。

〈出典〉ストバイオス 三・二七・三（誓いについて）。

『トラソーン』

ΘΡΑΣΩΝ

トラソーンは形容詞トラシユス *thrasos* 「大胆な、勇敢な、ほら

吹の」から派生した人名で、似たような名が新喜劇では「ほら吹き兵士」のニュアンスでよく用いられた。ローマの喜劇詩人テレンティウス作『宦官』のトラソール、メナンドロスのトラソールニデースやトラシュレオンなど。既述のごとく、ほら吹き兵士は喜劇に登場する典型的なタイプの一つである。Iokosは実在の人物名である可能性も示唆している。

九六

.....女よ、俺はお前より

おしゃべりなのには一度もお目にかかったことがないぞ。

蝸だって、カケスだって、夜鳴き鶯だって、燕だって、

キジバトだって、蟬だって「お前ほど喧しくはない」.....

〈出典〉アテーナイオス 一三三B、「彼らは口取りとして蟬や蝸なども食べる習慣があった。アリストパネスが『アナギュロス』で、へああ、蟬や蝸を食べたいものだわ。細い葦にとまっているのを捕まえてね」〔断片五三〕と。ケルコーペー *κερκωπη* とは、スペウシッポスが『類語辞典』第二巻で比較しているように、蟬やアティギニオン *τιτυγιων* に似た生物だ.....アレクシスは『トラソーン』でこう述べている。【本断片】。

【注】ここで仮に「蝸」と訳したケルコーペー *κερκωπη* という語は比較的珍しく、セミにはふつう4行目のテッティクス *τεττις* が使われる。エウスタテイオスに「リバニオスにもケルコーペーという語の使用がある」(decl.26,34)とあることからこの語が比較的稀

な語であることが裏付けられる。語構成要素としてケルコス *κερκος* 「尾」が考えられ、尾が長い種類のセミといわれる。鳴かない雌のセミという記述(ヘーシユキオス)もあるが、もちろんここでは当てはまらない。また、アテーナイオス引用文中のティティギニオンも蟬の一種としか分らないが、縮小辞の形態を取っているのも、同類の中では小さな種類と思われる。その他の小動物もよく鳴くものとして取り上げられている例は多い。なお、引用文中のスペウシッポスは哲学者プラトーンの甥で、アカデーメイアの後継者。彼の『類語辞典』一〇巻は『学術上同種の物について』というのが正確な書名である(散逸)。

『イアーススの女』

IAZIZ

*Zaekē*はこの題名がカリアアの都市名イアーススからとられたことはほとんど疑いない、としている。その場合イアーススは女性で、「イアーススの女」という意味になる。イアーススには普通名詞として「治療」の意味があるが、そんな抽象名詞はギリシア喜劇の題名としてはありそうにない。

九七

《アムピタペース。アレクシスが『イアーススの女』で。》

〈出典〉『反アッティカ主義辞典』p.83,15.

【注】ヘーシユキオス 44122にアンピタペース *αμφιταπείως* の説明として「両面に毛羽のある絨毯」とある。語構成要素のタペースはすなわちタペストリーである。今日のトルコ、イラン地域が絨毯の大生産地であったことを思えば、*Naeke* のイアーンソス説は説得力がある。

『ヒミルコーン』

IMIAKON

ヒミルコーンという名はハンニバルと同様、歴史上カルタゴ人貴族・軍人の名として数名が知られている。*Edmons* はこの喜劇を『カルタゴ人』の別題と考える。

九八

私は……、

たとえ彼らが温かな料理を出さなくても……。プラトーンは善いものはどこにあっても善いと言ってる。聞いてるだろうか？ 美味しいものは、あそこだろうとここだろうと絶対に美味しい……

〈出典〉アテーナイオス 三五四D、「そこでだれかが〈料理人たちは盛大な言葉の饗宴の間にも料理の準備に余念がないが、それは冷たいものを出さないためなのだ。なぜならだれも冷たい料理など食べはしないからね〉と言うと、キュヌールコスが言った。〈喜劇詩人アレクシスの『ヒミルコーン』にはこうある。【本断片】〉」。

【注】アテーナイオスの引用では冒頭の *ἐγώ εἶμι* 「私は」が地の文に紛れ込んでおり、*Kaibel* 校訂版以前には *Κυνηύρος* が自分を指したものと解釈されていた。今日では引用された詩句の行末の語と考えられている。一行目の引用されていない箇所は、(出された食事が温かくなくても)「美味しいと思う」といった類の内容だったと推定される。

『騎士』

IIIETZ

本劇の題名は単数であるが、アリストパネースとアンティパネースは複数形の題名の喜劇を書いている。いうまでもなくアリストパネースの作品は残存する。本劇はある程度年代が特定できる。詳しくは断片九九の注を見られたい。

九九

アカデーメイアやクセノクラテースの実態はそんなところだ。どうか神々がデーメートリオスを初めとする立法者たちにうんと恵みを授け給いますよう。というのも噂によると彼らは、若者たちに言葉の暴力を提供しているような連中は、アッティカを去って地獄に落ちるがいい、と言ってるそうだから。

〈出典〉アテーナイオス 六一〇E、「カリュステイオスが『歴史』の中で書いているように(断片九M)、リュウシマコス王は布告を発して哲学者たちを自分の領土から追放したが、それは彼だけでな

くアテナイ人もやっている。ともかくアレクシスは『騎士』の中でこう書いている。【本断片】。また、ソポクレスなる人が採決によってアッティカからすべての哲学者を追放した。このことについてはアリストテレス学派のピローンが記述した。このソポクレスのためにデモステネスの従兄弟デーモカレスが弁護演説を書いている。】

【注】クセノクラテースはアカデーメイアの第三学頭。デーメートリオスは「パレーローンの」と称された哲学者・政治家と「城攻めの」と称された軍人がいる。前者は前三一七年から、前三〇七年の民主制復活で亡命するまでアテナイの国政を任せられ、改革を行った。後者は前三〇七年からアテナイを統治した。本断片のデーメートリオスを哲学者の方とする説もあったが、今日では軍人とする説が確定している。従って本作品の成立は三〇七年以降、恐らくは「城攻めの」デーメートリオスがアテナイでの覇権を失う前三〇一年まで、と一応範囲を狭めることができる。いずれにせよ、少年を墮落させるとの嫌疑でソクラテスを処刑した類の保守的な立場からの発言で、おそらく題名となっている「騎士」の言葉であろう。アテナイオス引用文中のカリュステイオスは前二世紀後半のペルガモンの歴史家。リュージマコスはアレクサンドロス大王の武將で、大王没後トラキア王、マケドニア王。

一〇〇

甲…その杯って

若い娘の顔が金色に描かれているのじゃなかった？

乙…ええ、そうですとも。甲…ああ、なんて惨めな私！……

〈出典〉アテナイオス 四八一F。

【注】メナンドロス断片二四・四に「浮彫り細工の顔」とあ。三行目「惨めな」という形容詞から甲が女性であることが分かる。根は善良だが剛直・単純なほら吹き兵士と遊女の恋の鞘当ては喜劇によく見られるテーマの一つであり、Mainkeは、主人公である騎士が遊女の所有する什器類を持ち出し、酔いの醒めた遊女がそれを知って愕然としている、という設定ではないかとする。なお、この「杯」はキュムビオン *kymbion* でその複数。引用箇所前後はこのキュムビオンが言及されている喜劇断片が集中的に取り上げられている。

一〇一

また、テリックレースが作った杯で、周りに金冠をめぐらしたのが…。その金冠もメッキの安物じゃないんだから…

〈出典〉アテナイオス 四七一E。

【注】テリックレースは有名なコリントスの陶工。アテナイオスの引用箇所はテリックレースあるいはテリックレース風の陶器について述べている。

『イソスタシオン』

ΙΣΟΣΤΑΣΙΟΝ

イソスタシオス *Isostasios* は一般に「同じ重さの、対等な、妥当な」の意の形容詞だが、ここでは「バランスのとれた」といった意味であり、中性単数で遊女の名と推測されている。遊女の源氏名としては姿形の優美さをうかがわせて適切かもしれない。また、ヘーシュキオス 1984 に、*Isostasios hupou* の説明として「乳香、没薬」とあり、Bechtel は女性名を論じてこれに関連づけているそうだが、未見。ただ、LSJ の最新版 Supplement では 2 の「バランスのとれた」の項に *Isostasios hupou* が追加されている。これも香りのバランスの取れた、すなわち上質のというニュアンスに近いかもしれない。ヘーシュキオスの説明の「乳香」は *straxyn* であるが、この語はスタゾー *strázō* 「滴る、滲み出る」から派生した語。

1011

あいつらは割勘で飲んでいて、念頭にあるのは
ひたすら踊ることばかり。あいつら、魚だとか穀類の
名を持っているの。「魚」だの「海老」だの、
「カマツカ」だの「小麦粉」だの……

〈出典〉アテナイオス 一三四C、「アレクシスが『イソスタシオン』と題された劇でこう書いている。【本断片】。同一二七C、

「小麦粉について……アレクシスが『イソスタシオン』で言及してゐる」。

【注】一行目「割勘で」 *antō syngolaiou* は他の喜劇詩人たちにも見られる表現。詳しくは後で記す。「魚」「海老」「カマツカ」「小麦粉」はそれぞれオプソーン *Opsiou*、カラボス *Karabos*、コービオス *Kobios*、セミータリス *Semidaros* である。オプソーンは「料理、魚」を意味するオプソーン *opsou* から派生した人名。「カマツカ」と訳したコービオスは鯉に似た淡水性底生魚とされる。なお、最新の柳沼重剛訳（アテナイオス『食卓の賢人たち』2 二六頁。一九九八年、京都大学学術出版会）では解釈が大変異なっている。

材料持ち寄りの宴の席で、彼らはただ

人が踊るのを一心不乱に見ていた。その名も

「持参した」料理や食品の名前で、「おかずさん」、「大海老さん」、「はぜさん」、「小麦粉さん」。

まず筆者が「割り勘で」とした上述の *antō syngolaiou* を「材料持ち寄りで」と解釈している。これには二つの方向からの反論が可能であろう。確かに、シュムボレー *symbole* を語源的に見ると、「提出して」つにまとめるもの「つまり」持ち寄りの負担分」といった意味にはなるし、実例でも金銭とは限らないが、LSJ の関連項目（本断片からも引用されている）では、明かに割り勘ないし会費の意味で使用されている箇所がいくつか挙がっており、その反面実質的に食事の材料を指す箇所はない。さらに同所に挙げられているアレクシスからの別の引用は（断片一四七）、ヘッドバンド、雪

花石膏製の香水瓶など換金できそうなものである。ただし以上のことからシユムポレーが材料を意味するケースが皆無とまではいえない。しかし、宴会の参加者が持参した材料の名を持っていた、ないし一時的に使ったとするなら、「料理や食品」(筆者の訳は「魚とか穀類」)に定冠詞が付いていないのは何故であろう。柳沼氏がごく一般的な「割り勘」とする解釈を捨てた理由はこれらの不思議な人名以外には考えにくいのだが、持ち寄った材料から人名が作られた証拠はないし、むしろ定冠詞がないことでその可能性は小さくなっている。会食者がみな食物のような名前を持つというのは喜劇ならでは、これと材料持ち寄りを無理に関連付ける必要はないであろう。

次に柳沼氏の「人が踊るのを一心不乱に見ていた」という訳であるが、この「見る」(プレポー *Bléna*) という動詞はホラオー *bléna* と違って、誰かが何かをするのを見るという構文(对各十分詞ないし稀に不定法)が辞典にない。そもそもプレポーという動詞は、その結果として何かが見えるという側面より、「視線を向ける、注目する」といった、動作主体の態度ないし関与の仕方に重点のある語である。従って柳沼氏のような解釈は、辞典にはない例外が無いとはいえないが、紀元後数世紀の崩れたギリシア語ならともかく、まだ完全に古典期アッティカ文法の体系を維持している中喜劇では考えられない。この箇所も LSJ の *bléna* の項目中で取り上げられてはいるが、「〜に目を付けている、〜の目付きである、〜の様子である、〜のように見える」という項目の中に入っている。例をひとつ挙げれば、*amotriav bléna* は、「不審そうな目付きである、様子である」の意味になる。ここでは「踊る」という動詞の不定法と共に用いられて、やや分かりにくい「踊ることに目を付けてい

る」ということになるだろう。プレポーには不定詞とともに、「〜することに焦がれる、期待する、意図する」の意味があり、この場合これとほぼ同じ意味になるのではないか。アテーナイオスの引用箇所の直前には、酒を呑んだ(特にアテーナイの)人間がすぐに踊り出す、という内容の含まれる断片が三つ列挙されていることから考えても、ここでは「踊りたくてうずうずしている」という意味にとるのが正しいだろう。

一〇三

第一あの女たちにとっちゃ、寄ってきた連中を身ぐるみ剥いで儲けるのが肝心で、それに比べりゃ他はすべて余技にすぎず、だれに対しても悪巧みを企んでるんだ。そして金回りの良い時に何も知らない初心な女を新しく遊女として雇い入れる。あいつらが早速その女たちを改造すると、そいつらは性格も五外観も、前とはもはや似ても似つかぬ女になってしまう。ある女が小柄だったでしょう。そいつの靴底にはコルクの中敷が縫い込まれる。大女だったとする。いつも薄い沓を履き、すぼめた肩に頭をおつつけるようにして出てくる。それで背丈が減ったというわけだ。またある女は尻がない。一〇衣の下にパッドを付けさせる。すると、それを見た男どもは見事な尻だと大騒ぎ。もし腹がうんと出ていたらどうするか。やつらには喜劇役者が使う小道具のオッパイがある。そんなものを前に突き出すようにあてがって、まるで棒っこで突っ張るみたいにして腹の皮をへこませる。一五またある女は眉毛が赤い。煤で本物そっくりに黒く描く。

たまたま色黒だったなら、鉛白のおしろいで塗りたくる。色が蒼白くて気味が悪いようなら、頬紅を擦り込む。

身体にどこか奇麗なところがあると、剥き出しにして人目に曝す。齒並びが良い女は否が応でも笑わなければならない。二〇

どんなに素敵な口許だか、寄ってきた連中に眺めさせるためだ。だが、もしも笑うのを嫌がるならば、一日中奥に引っ込んでいることになる。まるで、肉屋が山羊の頭を売っているときも、

いつだって肉屋の手元にとつてある肉みたいなもの。

その間、銀梅花の細い棒を口に乗っすぐ銜えさせられる。二五
結局時がたてば、否が応でも笑うことを憶えるのだ。

〈出典〉アテーナイオス 五六八A、「アレクシスは『イソスタシオン』と題する劇の中で、遊女になるための準備と遊女たちの高度な化粧術について次のように書いている。【本断片】。アレクサンドレイアのクレーマーンス『訓導』三・八・一、「女の化粧三昧について」女たちをなじる喜劇詩人は他にもいて……アレクシスはその一人である。その一節をここに引用するが、これは微に入り細を穿った表現で最も破廉恥な輩をも赤面させるものである。【本断片】。エウスタテイオス『オデュッセイア注解』1522,10〔calceamenta〔靴類〕について〕ディアバトロン *diabaton*。これは〈薄い沓を履き〉〔本断片八〕とあるように、女性の履き物である。パウキス *paucis* も同じく女性の履き物。〈靴底にはコルクの中敷が縫い込まれている〉〔本断片七—八〕。

【注】韻律は trochaic tetrameter catalectic。長短長短を脚とし、これを四つ続けて一行とする。ただし、第四脚は長短長で一音節

欠けている。アレクシスの残存断片中最大のもの。これを女性嫌悪主義的な化粧批判と見るのは敬虔なキリスト教徒であるクレーマーンスらしいが、むしろ喜劇として当然の誇張や逆転した視点からの観察はあるが、どれも今日まで続いている、むしろ今日ではもっと過激に発達している「化粧術」とその裏面の観察眼に注目したい。七行目についてはクセノポーン『家政論』一〇・二に「実際よりも背を高く見せようとして、丈の高いサンダルを履いている」という表現が女性について使われている。一三行のステアティア *stethia* は「小さな胸、乳房」の意味で、喜劇役者云々で分かるように男の役者が女を演じる場合に使うパッドのようなものらしい。クレーマーンスの引用ではティッテイア *titthia* 「乳首」の与格が使われており、それに従って校訂する説もあるが、前行の内容からして、作り物の「乳首」を付けるというわけにはいくまい。もっとも、作り物の乳房に乳首もついている可能性はある。役者がそのような小道具を使うことについては、ルーキアノス『舞踏論』二七に、「胸当てを前に付け、人工的な膨らみを作って見せる」とパントマイム役者について述べられている。一四—五行は語法がひどく錯綜していて、解釈が困難であり、恐らく壊れているものと思われるので、大体の意味を付けた。要は崩れた体形を隠すために、胸を大きく見せてバランスをとり、コルセット様のものをつけて腹を凹ませるといったことのようにある。一六行目、ストラポーン『地誌』四・二三・六二に引用されたニコストラトス（後二世紀のソフィスト）『結婚訓』に、「鉛白おしろいやアイシャドーその他の顔料を塗って素顔を隠す」とある。十八行、「頬紅」としたバイデロース *zuderos* は「シーシュキオス 56 に「軟膏の名称」とあり、アル

キプロン（後四世紀の書簡文学作者）二・八・三に「〔女性が〕鉛白おしろいと頬紅（バイデロス）で頬に色を塗ること、才能ある画家に劣らない」とある。二四―五行について「Loeb版ではアリストパネース『鳥』一〇八一が参考箇所として挙げられている。そこではさまざまな鳥たちからなるコロスの長が鳥刺しの罪状を訴えて、「黒鶉の鼻にその羽根を押し込み」と述べている。もっともこれは、売り物に対する侮辱という点で一致しているのみで、然程関連があるとは思われない。齒が綺麗なのに笑わない遊女は訓練のためではなく、お仕置きのために棒を銜えさせられ、笑顔を強制されるのである。

『カラシーリス』

KΑΛΑΣΙΡΙΣ

カラシーリスは裾に房や縁の飾りがあるエジプトやペルシアの長衣を指す。人名にもなり、四世紀のヘーリオドーロスの小説『エテオピア物語』では重要な登場人物であるエジプト人聖職者の名となっている。

一〇四

雑貨売場を通過して私をどこへ連れて行くのか？

〈出典〉ポルックス 一〇・一八、「アゴラの中の家庭雑貨が売られていた場所はキュクロイ *kyklois* と呼ばれていた。アレクシス作『カラシーリス』の【本断片】という一節はそれを示唆して

いるように思われる」。

【注】この断片に続いて、「ディーピオスはもっと明白に『狂人』の中で」と前書きして断片五五が引用されており、寝台、敷物など家庭雑貨が羅列されている。ポルックスに従って「雑貨売場」と訳した *kyklois* はラテン語の *cyclus* と同根で、英語の *cycle* と繋がっている。

『カルタゴ人』

KΑΡΧΗΔΟΝΙΟΣ

メナンドロスが同名の劇を書いている。『ヒミルコーン』をこの作品の別題とする説には既に触れた。

一〇五

《お前はバケーロスだ：この言い回しは柔弱な者、男らしくない者に適用される。本来バケーロスは去勢された者のことである。メナンドロスが『ヒュムニス』で、アレクシスが『カルタゴ人』でこの言い回しに触れている》

〈出典〉ゼノビオス Ath. II 70.

【注】バケーロス *Bakchos* はキュベレーに仕える宦官。転じて女みたいな者の意味になる。バケーロスは音位転換によってカペーロス *kappalos* ともなる。LSJによるとヘーシユキオスにはカペーロ

スについて、「性器をとりさられた者、あるいは驢馬」とある。と。

『カウノスの人々』

KATNIOI

同名の喜劇をティモクレーヌが書いている。カウノスは小アジアのカーリアー南東の古い港町。

一〇六

その風呂には釜の中の火も
閉め切られたサウナも……

〈出典〉ポルックス 七・一六六、「かまどとサウナは風呂屋の一部である。アレクシスは『カウノスの人々』で【本断片】と」。

【注】不完全な引用で否定詞が入っているが解釈できない。アリス
トパネース断片七三九に *káimnos Balaneíou* 「風呂の炉」とあり、
テオプラストス『人さまごま』九・八に *tá kalaxía tá eu tái
Balaneíou* 「風呂の〔銅製の〕湯沸し」とあるのは本断片の
boxáron 「釜、竈」と同じものであろう。サウナと訳したのはアレ
イプテリーオン *áleutírou* で、本来はギリシアの体操場
gymnasion やローマの浴場で浴後体にオイルを塗る場所を指し、
[S]によると、転じて蒸し風呂の意味でも用いられるようになったとい
う。しかし、汗が引くのを待ってマッサージを受けるなど寛
ぐことのできる場所かもしれない。

『有罪宣告を受ける男』

KHPPTOMENOS

「召喚される男」かもしれない。また、Schweighauser は
éxhuprotómenos と読んでおり、その場合「追放宣告を受ける男」
の意味にもなりうる。

一〇七

それで提灯の中から燭台を取り出そうとした時、
奴は粗忽にもすんでのことで火傷するところだった。
というのも、必要以上に腹に近づけてこっそりと……

〈出典〉アテナイオス 六六六F。この少し後に断片九一と一五
一が引用されている。

【注】原文二行目の *épro iakáns* は本来「脇の下に」の意であるが、
「ひそかに、秘密裏に」の意味で用いられる。火の点いた燭台ない
しランプを近づけた体の部位が脇の下でかつ腹の近くとは取りにく
いので、ここでは「ひそかに」の意味と思われる。とすれば、提灯
(あるいは常夜灯のようなものか)の中から燭台を取り出したのは
正当な行為ではなかったと考えられる。人に見咎められないよう体
で隠すようにして盗んだのかもしれない。この喜劇の題名との関連
も漠然とながら思い浮かぶわけである。

『キタラ弾き』

ΚΙΘΑΡΑΔΟΣ

キタラ弾きとはキタラ（リュラと原理は同じで、大型の豎琴）を弾きながら叙事詩を語る、いわば日本の琵琶法師のようなもの。クレアルコスに同名の喜劇がある。

一〇八

『夢はわれわれにとっての結果となった』。アレクシスが『キタラ弾き』で。』

〈出典〉『反アッティカ主義辞典』p.96,9.

【注】エクバイノー *εγκαινο* は何かの「外に踏み出す」が原意だが、あることが「結果として生じる」の意味で多用される。さらにその範疇の中で予言が「現実となる、成就される」という意味も生じる。ここも夢を予言の一種と考えれば、同様に取る可能性はある。また Kock のように、『反アッティカ主義辞典』では「よく」「悪く」などの副詞が略されているとも考えられよう。

『クレオプリーネー』

ΚΛΕΟΒΟΥΡΙΝΗ

クラティノースが『クレオプリーナイ』（複数形）を書いてい

る。クレオプリーネーについてはディオゲネース・ラーエルティオスの七賢人の一人に数えられるクレオプーロスの項目で言及されている。以下その部分を引用する。「そして彼（クレオプーロス）にはクレオプウリネという娘があり、その娘は六脚韻で謎めいた詩を書いた詩人であったとのことである。この娘についてはクラティノスも——複数形で「クレオプウリナイ」となっているが——彼女と同じ名前を持つ劇作品のなかで言及している」（加来彰俊訳、『ギリシア哲学者列伝』上、八十二頁、岩波文庫）。クラティノースの題名が複数形であることもあるし、この題名が歴史的な人物を指しているとは考えにくい。登場人物の性格付けに関連するのかもしれない。

一〇九

I 《（シノーペーについては）アレクシスが『クレオプリーネー』で言及している。》

II 《シノーピサイ *συνπισαι* の言葉は遊女シノーペーの名から造語された。アレクシスが言ったように、彼女は卑狼な振る舞いをするので擲諭の対象となっていたからである。》

III 《シノーピゼイス *συνπιζεις*、アコラスタイネアス *ακολαστεινης* の代わり。アレクシスが言ったように、彼女は卑狼な振る舞いをするので擲諭の対象となっていたからである。》
IV 《シノーピサイ。卑狼な振る舞いをするという意味で。シノーペー出身のある遊女の名から。》

〈出典〉 I アテーナイオス 五八六 A。II ポーティオス 二〇

512.27. III アポストリオス 一五・五〇。 IV 『ポドレイアン図書館
俚諺集』八四〇。

【注】シノーペーは古代に栄えた黒海沿岸の町の名でもあり、遊女の名はいずれ源氏名の可能性も高いから出身地名をそのまま使っているとも考えられる。いずれにせよアテーナイオスの文脈からこの遊女シノーペーの名がいくつもの喜劇に登場していることが分かる。それから作られた動詞はもしかすると限定された具体的な意味を有しているのかもしれないが、今のところ分からない。

『クニドスの女』

KN1A1A

クニドスと言うまでもなくブラクシテレース作のアプロディテー像で有名な小アジア西南端の古代都市。

一一〇

ごろつきのディオドロスは二年間で

父親の遺産を湯水のように使い果たした。

全財産を闇雲にしゃぶり尽くしたのだ……

〈出典〉アテーナイオス 一六五D、「ウルピアーノスがいう」私は悪名高い放蕩者を二人知っている。一人はアレクシスが『クニドスの女』の中で次のように言及しているやつだ。【本断片】。

【注】「湯水のように使い果たした」というのは意識で、直訳は

「財産をボールにした」、つまり玩具のようにぞんざいに扱った、という意味である。アテーナイオスの引用箇所が続いてアレクシス断片二四八が引用され、そこではある男が「五日で」財産を蕩尽したことがほとんど同じ用語で表現されている（動詞だけ違うが、意味は同一と見てよい）。

『左官』

KON1ATH2

アマビスが同名の喜劇を書いている。

一一一

………キムビオン、

ピアレー、トラゲラポイ、キュリクス………

〈出典〉アテーナイオス 五〇〇E、「トラゲラポス *τραγέλαφος*」ある種のカップはそう呼ばれ、アレクシスが『左官』で言及している。【本断片】。

【注】ここに並べられた単語は形態こそ違え、どれも飲料特に酒を入れるカップの一種である。キムビオン *κυμαίων*、ピアレー *πυρίων*、キュリクス *κύλικες* はどれも酒杯と訳してよい。ただトラゲラポイは面白い名称なので少々説明する。語構成要素前半の *τραγ-* はトラゴス *τράγος* すなわち牡山羊、後半はエラポス *εραπος* すなわち鹿で、本来はオリエントに由来する空想的動物を指すという。

ケンタウロスやキマイラに似たこの空想上の合体動物「山羊鹿」はギリシア人の嗜好に合って装飾的に用いられ、酒杯にも応用されたらしい。引用箇所が続いてメナンドロスとアンティパネースの用例が挙げられている。

『女髪結い』

KORPIZ

アムピスとアンティパネースが同名の喜劇を書いている。

一一一

大勢の連中が一騒ぎしようとしてこっちへ向かって来るのが見えるからな。ここには紳士淑女が集っているものと見込んでいるんだ。どうか夜、俺が一人でいる時には、踊りですっかり盛り上がった後のお前たちとは、出くわしたくないもんだ。だって、万一出会ったなら、羽でも生えぬ限り上着が無事で済むはずがないんだから……

〈出典〉アテナイオス 三六二C。

【注】引用箇所はバッリゾー *βαλλίζω* という動詞、及びバリスモス *βαλλισμός* という名詞について論じている。これは [S] によると跳び回る、すなわち踊るという意味の動詞とそれから派生した名詞である。語源的にはバロー *βαλλω* 「投げる」と関連するらし (Frisk, H.: *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, Bd. 1 p.

215)。バローは身体の激しい動きを表現する場合があるのでこの関連は理解しやすい。英語の *ball* の語源は仏語 *bal* から来ており、これは後期ラテン語の *ballare* を語源とする。そのまた語源がこのバリーゾーであるという説はあるが、形態がやや離れているため疑問を呈する研究者もいる。